

自 己 評 価 書

(令和 6 年度)

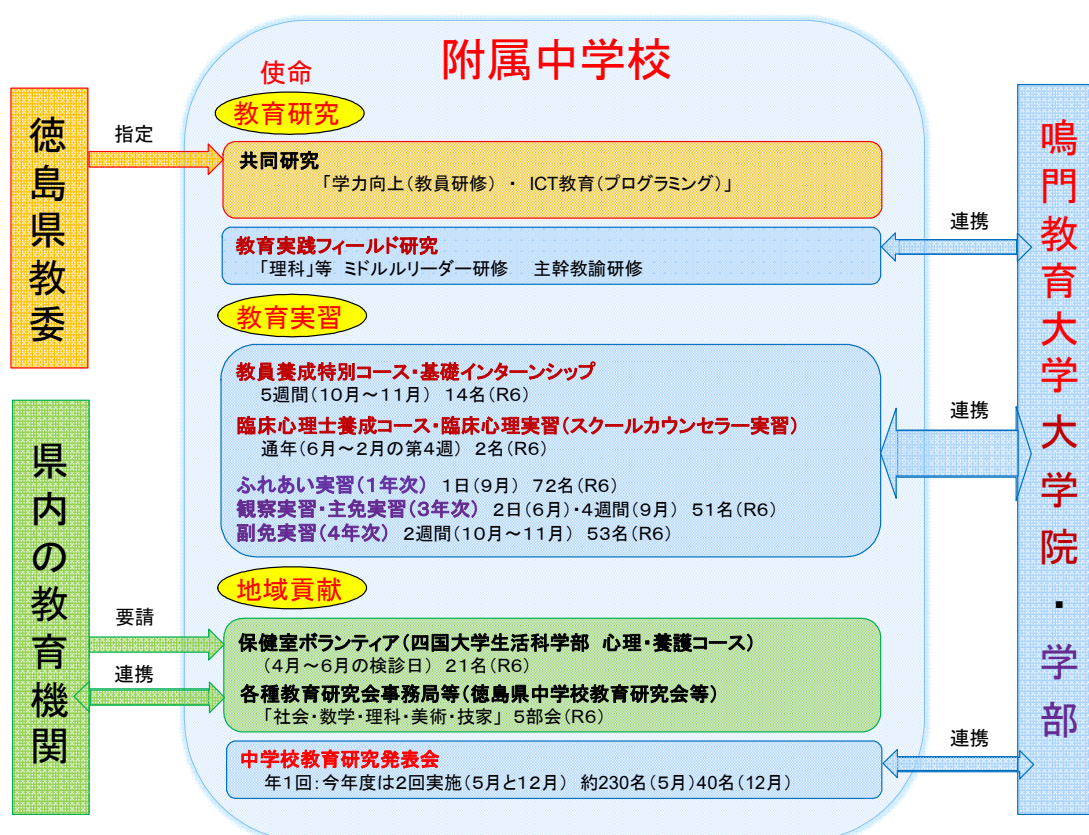
令和 7 年 3 月

鳴門教育大学附属中学校

目 次

I	学校の現況及び目標	1
II	重点目標に対する自己評価	2
1	STEAMIC（STEAM for IC）教育の推進	2
2	いじめの防止	7
3	基本的生活習慣の徹底	11

本校の使命に関する取組状況



I 学校の現況及び目標

1 現況

- (1) 学校名 鳴門教育大学附属中学校
- (2) 所在地 徳島市中吉野町1丁目31番地
- (3) 学級等の構成
 - 1 学年 4 学級 2 学年 4 学級
 - 3 学年 4 学級 計12学級
- (4) 生徒数及び教員数(令和6年5月1日)
 - 生徒数 400 人 教員数 25人(正規教員)

2 目標

(1) 目的・使命

本校の目的は、附属中学校校則第1条において「小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すとともに、鳴門教育大学（以下「本学」という。）における生徒の教育に関する研究に協力し、かつ、本学の計画に従い学生の実習等の実施に当たることを目的とする」と定めており、本校は義務教育を行う任務とともに、教員養成大学の附属中学校として、次のような使命をもった学校である。

- ① 大学と一体となって、教育の理論及び実践に関する科学研究を行う研究学校としての使命
- ② 鳴門教育大学の学部学生の実地教育（教育実習）及び大学院生との教育実践研究等を行う使命
- ③ 教育界の課題の解明に努め、関係機関と連携し、本県中学校教育推進に寄与する使命

(2) 教育目標

本校は、校則第1条に示されている中学校教育の目的の達成のため、次の教育目標を掲げ、めざす生徒像・教師像・学校像を明確に示している。

知・徳・体の調和的人格の完成をめざし、自主・自立の精神、創造的能力、豊かな人間性をそなえ、国際社会の発展に寄与することのできる心身ともにすこやかな中学生を育成する。

めざす生徒像

- 優しく思いやりの心を持ち、人の気持ちのわかる生徒
- 目標を持ち、自主的、創造的に学ぶ生徒
- 強い意思と体をもつと共に、しなやかに生きる生徒

めざす教師像

- 生徒を愛し、生徒とともに伸びる教師
- ゆるぎない使命感、鋭い教育観をもった教師
- 優れた指導力をもった教師
- 強い責任感をもって、何事にも丁寧な対応ができる教師

めざす学校像

- 創造的な知性を磨く学問学校
- 情熱的な意志を鍛える鍛錬学校
- 強健な身体を練る体育学校
- 敬和奉仕の精神に生きる人間学校

(3) 令和6年度重点目標（実践事項）

① STEAMIC（STEAM for IC）教育の推進

- ア 探究的な学習を通して主体的に取り組む授業実践
- イ 総合的な学習の時間における STEAMIC 教育の導入

② いじめの防止

- ア 人の心の痛みに共感できる仲間づくり
- イ 愛校心を育む美しい環境の創造

③ 基本的生活習慣の徹底

- ア 凡事徹底の上、より高い目標に向かって挑戦し続ける姿勢
- イ 笑顔で元気なあいさつを通して、学校を活性化させる

(4) 令和6年度評価項目（評価指標）

① STEAMIC（STEAM for IC）教育の推進

- ア 保護者対象アンケート（7月と2月に実施）
- イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）

② いじめの防止

- ア 保護者対象アンケート（7月と2月に実施）
- イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）

③ 基本的生活習慣の徹底

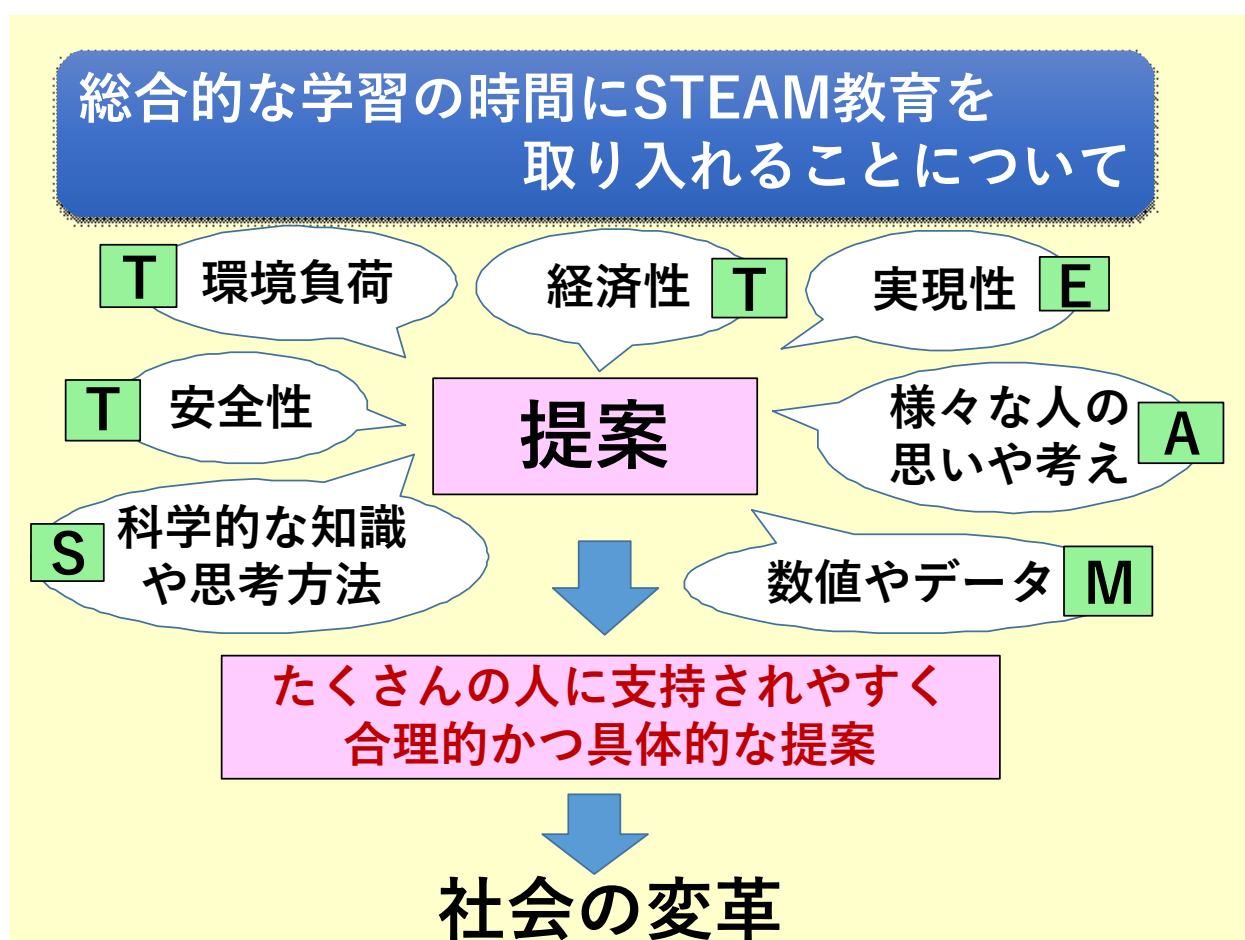
- ア 保護者対象アンケート（7月と2月に実施）
- イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）

Ⅱ 重点目標に対する自己評価

重点目標 1 STEAMIC (STEAM for IC) 教育の推進

文部科学省では、各教科等の学びを基盤とし、様々な情報を活用しながらそれらを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結び付けていく資質・能力の育成を目的として、STEAM教育等の教科等横断的な学習を推進している。これを受けて、本校でもSTEAMIC教育を推進していくための研究実践に取り組んでおり、まず各教科において、「探究的な学習の充実」に着目し、研究実践に取り組んできた。そして、その成果を5月末の教育研究発表大会において公開授業を行い、授業後の各教科ごとの研究会において参会者から意見を頂き、成果と課題をまとめることができた。これからも、それぞれの教科において、探究的な学習を充実させることで、その教科が目指す資質・能力をよりよく育成していくこととあわせて、学習や日常生活等の様々な場面の中で、探究的に学ぶ生徒を育成していきたいと考えている。それにより、各教科内容においても、生徒がSTEAMICの視点から考える習慣が身につく、教科間の連携も含めた深い学びへとつながっていくことが実感できた。

そして、STEAMIC教育のより具体的な発表の場として、今年度2度目の公開研究発表会を12月に総合的な学習における、3年生の「模擬県議会」で発表し、県内外の先生方から、好意的なご意見を頂くことができた。今後は更に、子供たちのS、T、E、A、Mそして、I、Cの視点を生かした考え方を通して、より深い思考で、課題解決の方策が考えられるように、総合的な学習の時間を工夫し、高等学校での、総合的な探究の時間に接続して行きたいと考えている。





(2年生の職場体験「FM徳島」 生出演中)



(2年生の職場体験「三谷薬局」での様子)



(総合劇な学習の時間の集大成「模擬県議会」の様子)



(今年の「模擬県議会」は公開研究会として開催し、県内外から多くの先生方が来校された)



(5月の研究発表会の様子 5年ぶりに入場制限なしでの開催ができた)

(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 探究的な学習を通して主体的に取り組む授業実践

当 初 申 告	最 終 申 告	評価
数学的な知識技能や思考力・判断力・表現力を育成する授業の実践を進める。	個別・協働的な学習を選択させ、授業展開を委ねることは十分できなかったが、生徒自ら考える授業実践は、努力できた。	B
「主体的に学習に取り組む態度」を適切に評価するための方法を工夫し、実践する。	教材研究や指導方法に十分な時間をかけ、その成果が探究的な学習へと結びついたが、評価にまで十分な時間をかけることができなかった。	B
探究的な学習の充実に向けて、生徒が探究の過程を意識したり、学習状況を把握しやすい教示やワークシートを作成する。	学習の振り返りの内容を forms で入力させたものを生成 AI を活用し、主体性の評価につなげることができた。	A
見方・考え方の視点で生徒の思考が活発に働き、自ら新しい価値を創造することができる態度の育成を目指す。	見方・考え方の視点を取り入れ、生徒自らが課題を設定し、主体的な学習につながる探究的な学びが実践できた。	A

イ 総合的な学習の時間におけるSTEAMIC教育の推進

当 初 申 告	最 終 申 告	評価
総合的な学習の時間における、課題探求学習を充実させ、主体的な学びを通して、STEAMIC 教育を推進する。	模擬県議会を2日間開催し、その実施に向けて年間を通して、計画的に学習を進め、STEAMIC の考え方が身についた。	A
STEAMIC 教育を総合的な学習の時間に取り入れることで、生徒の課題解決能力を向上させる。	模擬県議会の取組において、STEAMIC の視点を意識させて、学習をさせることができた。	A
ICT 機器を活用した授業実践を積極的に行い、指導力の向上に努める。	テスト解説や観察等の場面で積極的に活用できたが、更なる活用方法も探りたい。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 年間指導計画の見直しを取り入れたことで、各分野のバランスを保ちながら、より幅広い活動ができ、探究的な学びへとつながることが実感できた。
- 探究的な学びを目指す中で、個別最適な学びと協働的な学びの充実に向けて、その手がかかりとなる取組が多く見られた。
- STEAMIC のそれぞれの視点を意識しながら、模擬県議会における「徳島県の課題」解決に向けた提案が具体的にでき、従来の議案書より、深みのあるものに仕上がった。
- STEAMIC の視点を取り入れることで、課題解決への道筋がよりわかりやすくなることを子供たちが実感できていたので、今後は、継続して STEAMIC 教育に取り組むと共に、教科間の取組の中でも生かしていける手応えを感じた。

(2) 改善を要する点（課題）

- 教材研究を深める中で、大学の先生からのアドバイスは大変ありがたく、参考になったが、大学の先生方と十分に話し合い、ご指導いただく時間が確保できなかった。
- 探究的な学習を深めるために、コミュニケーションの目的・場面・状況を明確にし、海外の方と対面だけではなく、文面でもやりとりができる状況を作るとができれば、より学びが深まると思った。
- 今回の総合的な学習の時間における、「模擬県議会」に向けて、STEAMIC の観点を取り入れるために、自分たちだけで調べた内容を聞いてもらい、実際の現状や問題点を県庁へ行って各課の専門家から教えてもらったり、議案書が完成すると、またそれぞれの委員会が専門家を学校へ呼び出して、研修をおこなった。その後、議案書を清書し、討論会当日を迎えるのであるが、これだけの実践をすることで、子供たちは大きく成長することができた。そして、その過程を経て、「模擬県議会」へ到達するため、子供も教員も、その達成感は何事にも代えがたいものがある。ただこれだけの規模で行うには、「持続可能な取組」にすることが今後の課題となる。
- 「題材の自由度」が多いほど、生徒から出る多様な考えや意見を受容し、探究的な学習に主体的に取り組ませることができたが、その分時間がかかることや、授業の中で起こる「不確定要素」への対応を考慮しなければならなかった。授業時数や生徒の現状を考慮したうえでバランスをとる必要性を感じた。

以上の内容を総合し、４段階中の「 B 」と判断する。

- | | |
|---------|----------------------|
| 自己評価の基準 | A 十分達成されている |
| | B 達成されている |
| | C 取り組まれているが、成果が十分でない |
| | D 取り組みが不十分である |

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

重点目標２ いじめの防止

いじめは、どここの学校にもあり得るという認識のもと、本校においてもその防止に向けて、早期発見と対応に向けて全校一丸となって取り組んできた。

本校では、年２回実施するいじめに関するアンケート調査と三者面談、QU 調査（学校生活全般の満足度調査）等の結果を分析し、取組が適切に行われたか否かを検証して、期待するような指標等の改善が見られなかったような場合には、その原因を分析し、取組内容や取組方法の見直しを行ってきた。具体的には、「ささいな兆候であっても、いじめではないかとの疑いを持って、早い段階から複数の教職員で適切に関わり、いじめを隠したり、軽視したりすることなく、いじめを積極的に認知する」ことを全教職員共通理解の元行ってきた。そして、毎月実施している「生徒指導委員会」（管理職、各学年主任、いじめ防止担当教員、養護教諭がメンバー）において、各学年の状況を共有してきた。相談体制についても、週１回のスクールカウンセラーによる相談が広く浸透し、気軽に相談する生徒の割合も増えている。

また、いじめ防止に向けた道徳や特別活動における、教材や活動の工夫については、常に学年ごとで相談しながら同一歩調で進め、授業での様子や授業後の子供の感想等について、学年会を開いて確認し合ってきた。今年度は他にも、徳島県が企画した、「徳島県児童生徒 6 万 5 千人のいじめ防止一斉学習 2024」に本校も参加し、12月17日に全学年実施した。また年間３回ほど生徒と担任の二者面談を行い、日々の日記のやり取りだけでは気づかない、子供たちが抱えている悩みや思いを聞くことが、いじめに関しての早期発見にも繋がっている。このように、「附属中学校いじめ防止基本方針」を基に、学年団を中心として組織的に取り組んだ。

そして、安心・安全な学級作りや相手を思いやれる仲間づくりには、体育祭や文化祭をはじめとした学校行事は重要である。今年は、コロナ禍でできなかった、昭和 40 年頃から続く、「新入生歓迎音楽会」や文化祭における 3 年生全員による「ハレルヤ合唱」も復活した。どちらも在校生は見たこともない行事ではあったが、ビデ等を参考に、見事やり遂げることができた。どちらもその指導をリードした音楽教員は本校に赴任したときは、すでに中止になっていたのも多大な苦労があったものと思われる。



（「新入生歓迎音楽会」新入生の合唱の様子）



（３年生の合唱の様子:この制服も今年が最後）



（５年ぶりに復活した文化祭での３年生の「ハレルヤ合唱」）



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 人の心の痛みに共感できる仲間づくり

当 初 申 告	最 終 申 告	評価
道徳の時間や学活などの時間を通して、人の心の痛みに共感できる仲間作りをめざし、人を思いやる言動や気配りができる学級集団をつくる。	授業中だけでなく、休み時間や昼休み、そして行事の準備をするにあたり、生徒同士で支え合い、協力できるようになった。優しい気配りもできるようになった。	A
生徒が「自律」し、自他を大切にできる学校生活を送れるように、粘り強く指導を重ねる。	周りの人のことを考え、行動することができる生徒が大幅には増えなかったが、帰りの学活などでは周りのために行動できる生徒が増えてきた。	B
生徒と良好な人間関係を築き、対話を大切にすることで、いじめを許さない居心地の良い環境を心がける。	生活記録の提出を全員に毎日させることができ、生活記録を通して、生徒の心情を知ること多かった。	A

イ 愛校心を育む美しい環境の創造

当 初 申 告	最 終 申 告	評価
生徒が互いに認め合える雰囲気学級全体を作り、クラスが居心地のよい場所となるような学級経営を心がける。	共有スペースだけでなく、机の中やロッカーの中も整頓を促し、美しい環境の中で生徒が落ち着いて学校生活を送れた。	A
生徒と共に清掃に取り組み、清掃の仕方を丁寧に指導し、清掃活動を通して愛校心を育んでいく。	トイレ掃除にも熱心に取り組む生徒も多かったが、教員が見回っていないと手を抜く生徒も若干名見られた。	B
普段の清掃活動に比べて、行事の前等は特別清掃として、特に念入りに生徒と共に活動し、環境美化の推進を通して、母校を美しくすることの意義を理解させる。	学年の清掃分担場所が広く、毎日全てを見回することはできなかった。清掃分担場の細分化と清掃内容の周知を徹底することで時間内の清掃の質の向上は見られた。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 友達との関わり方に不安がある生徒も適度な距離感で関わるができるようになってきた。生活記録のやりとりで、生徒の考えていることや現状を把握することができた。生徒の表情や様子を捉えて対応できるようになった。
- 生徒間のトラブルがあっても、丁寧に聞き取り、指導の理由を生徒・保護者共に確認のうえ共通理解を図りながら進め、記録に残すことができた。
- 昼休みの廊下や教室の巡視をすることで、生徒は常に教師が見守ってくれているという安心感を持てるようになり、その結果、巡視中の教員に些細な悩みでも気軽に話しかけてくるようになり、生徒と教師の距離感がちぢまるきっかけとなっていた。

(2) 改善を要する点（課題）

- 生徒とのコミュニケーションを積極的に図ろうとしたものの、授業開始前や、昼休み等、限られた時間帯に限定され、全ての子供たちへ毎日一声かけるというのは、十分実践できなかった。
- 子供たちには多種多様な価値観があり、それを認め合いながら、学級の全員がこのクラスでよかったと思える一年にしようとスタートしたが、各自の居場所を十分に確保して、心おきなく過ごせる学級づくりは十分には達成できなかった。
- 生徒の出す小さなサインに気づけることもあったが、見逃していることもあった。もう少し普段から、一人一人の生徒の様子を理解するために、家庭の背景や教員間の連携を密に行い、接していきたい。

以上の内容を総合し、４段階中の「 B 」と判断する。

- | | |
|---------|----------------------|
| 自己評価の基準 | A 十分達成されている |
| | B 達成されている |
| | C 取り組まれているが、成果が十分でない |
| | D 取り組みが不十分である |

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

重点目標 3 基本的生活習慣の徹底

あいさつができる、人の話が聞ける、時間が守れる、といった基本的な生活習慣がきちんとできることの重要性や、あたりまえのことをあたりまえにできる「凡事徹底」は、学校生活の基本であり、それができたうえでの学力向上や、仲間づくりであることを全校生徒に周知している。なかでも、あいさつは、朝はそれによって1日が気持ちよく始まるように習慣付け、校内でもすれ違う人と、自然でさわやかなあいさつが心がけられるよう、全校に呼びかけた。

人の話をよく聞くことについては、授業中に限らず、様々な伝達や諸注意も同様に、そのことの重要性をしっかり担任を中心に子供たちに語ってもらった。話を聞き逃してしまったばかりに、どれだけ自分が損をするかだけでなく、人にも迷惑をかけてしまっているということを理解させ、義務教育である中学生の間にそれらをしっかりと身に付けさせたい。

時間を守ることについては、朝の登校はもちろん、授業においても5分前着席の徹底を呼びかけた。あたりまえのことがあたりまえにできるように、仲間同士で声をかけながら自分を律することは、今までにも言われ続けているであろうが、まだ十分でない者は、義務教育最後の中学生の間に、しっかりと身につけて、次のステージへ進んでもらいたい。



(毎朝の登校風景)



(朝のあいさつ運動の様子)



(登校風景))



(授業の様子)



(人権の花 贈呈式)



(ボランティアの人たちと一緒に移植)

(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 凡事徹底の上、より高い目標に向かって挑戦し続ける姿勢

当 初 申 告	最 終 申 告	評価
自ら判断し、進んで正しい言動を取ることができる生徒を育成する。	話し手に意識を集中する習慣を付けさせたことで、話を聞く姿勢はできてきたが、時間を厳守できない者も見られた。	B
規律を守り、自主的・自律的に行動する態度を養うために、学校生活のルールを厳守する指導を徹底する。	学校の様子を生徒自身に客観的に捉えさせることで、目標を達成する理由が明確になり、行動に移せる生徒が多くなった。	A

イ 笑顔で、元気なあいさつを通して、学校生活を活性化させる

当 初 申 告	最 終 申 告	評価
あいさつを通して、学校生活を活性化することのできる生徒の育成をめざし、子供たちの自信のある行動へもつながるような指導を心がける。	多くの生徒は、自発的にあいさつを行う習慣が定着してきた。一方で、一部の生徒はまだ、あいさつへの積極性が見られないので、意識を高める必要性を感じている。	B
部活動は、対外試合や大人との接触も多いので、そういう機会に爽やかなあいさつがしっかりとできるように、あいさつ強調週間等を設けて、指導する。	部活動の練習中에서도、来客や教師に対して、手を止めてからあいさつをするように継続的に指導してきた成果が見られるようになったが、強調週間は設定できなかった。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 時間の厳守や、人の話をよく聞く、とい点においては、なぜそれが大切なのかをしっかりと理解させることで、概ね満足できるくらいになってきたので、これを継続して全校生徒がいつでもできるように習慣化させていきたい。
- 生徒会を中心とした幟を持つての毎朝のあいさつ運動は、雨の日も寒い日も年間を通して実践でき、その成果もあり、朝のあいさつは、自分からできる生徒が多くなった。朝から爽やかなあいさつをすることで、1日のスタートが充実したものになることを実感する生徒がふえた。

(2) 改善を要する点（課題）

- 朝のあいさつや、校内でのあいさつは大きな声できる生徒が増えたものの、他学年の先生や来校者等には、もう少し大きな声でできるよう習慣づける必要がある。
- 生徒が校内で出会った人には、自然にあいさつができるように、朝の玄関前でのあいさつをできるだけ笑顔で教員の方からすることで以前よりは積極的にできる生徒が増えたが、更に学校が活気づくまでのあいさつの励行には、もう少し手立ての工夫が必要だと感じた。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準 A 十分達成されている
 B 達成されている
 C 取り組まれているが、成果が十分でない
 D 取り組みが不十分である

＊ 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

Ⅲ 別添 自己評価根拠資料一覧

	観点番号	資料番号	資 料 名	備考
1	1・2・3	参考資料1	令和6年度学校評価アンケート結果 (保護者対象アンケート集計結果)	資料回収
2	1・2・3	参考資料2	教職員対象自己申告による目標管理自己 評価結果	資料回収
3	1	参考資料3	令和6年度全国学力・学習状況調査結果 (学力調査)	資料回収
4	2	参考資料4	令和6年度学校生活アンケート集計結果	資料回収
5	2・3	参考資料5	令和6年度全国学力・学習状況調査結果 (生徒質問紙)	資料回収